会員企業だより -Berita perusahaan-

企業訪問リポート

株式会社愛鶏園

株式会社愛鶏園（本社：神奈川県横浜市）は1925（大正14）年創業、たまご一筋に90余年、革新的な取り組みを次々と実践してきた日本養鶏業のパイオニア。現在では埼玉事業所（埼玉県深谷市）、茨城事業所（茨城県小美玉市）の2拠点で200万羽を飼育し、1日160万個の鶏卵を出荷する日本有数の養鶏場となった。2009（平成21）年に技能実習生受け入れを開始して10年、延べ90名の受け入れ実績を誇り、優良認定企業として3号技能実習生は現在4名を受け入れ。今後も積極的に技能実習生受け入れを促進、畜産農業（養鶏）の技能を伝えていく。

齋藤大天代表取締役

■いのちを救ってくれたたまごを皆の手に

物価の優等生として、価格安定の代名詞である「たまご」。創業者・齋藤虎松氏が、戦時中不治の病であった結核療養のために10羽の鶏を飼い始めた当時、日本で流通している卵の大半は中国からの輸入、ひとりあたりの年間摂取量は34個と、大変な貴重品だった。*1927（昭和2）年当時

「栄養豊かなたまごを、いつでも誰でも安心して食べられるように」これが（株）愛鶏園の始まりであり、原点。以来、研究・改良を重ね、養鶏先進国だったアメリカを視察し、全国の農家から多くの研修生を受け入れ、日本の養鶏業を形作ってきた同社。エサ作りから親鶏の元である種鶏場、ヒナの育成、たまごパックの選別包装から販売まで、たまごのすべてに携わり、革新的な技術を積極的に開発・導入してきた。そこには常に自主責任制の貫徹があり、「共に働き、辛抱し、愛する」生産者としての誇りがある。この先人の努力と英知で、たまごは現代日本に生きる私たちにとって、安くて手軽「あって当たり前」のものとなった。

一方で「丸くて便利な食材のもとはいのちであること」が実感できなくなってはいまいか。齋藤大天代表取締役が、創業90周年を機に、同社ウェブサイトを一新し、神奈川養鶏連と連動して「ぼくらのひよこプロジェクト」を立ち上げ一般消費者に向けて発信を始めたのは、今が「食といのち」という原点を再び見つめ直すときだと感じたからだそう。

疫病対策などの理由から、養鶏をはじめとする畜産業は消費者の周辺から遠く離れて存在感が薄れ、食といのちが結びつかなくなっている。子供たちへの食育と共に、その魅力を発信して畜産業を志す若者を増やす手段のひとつとして、齋藤社長らはユニークな活動を展開している。

この5月には新たに大規模養鶏場・小美玉ファームが落成した（株）愛鶏園。「有機循環型農業」をキーワードに「100年企業」を目指す。

ぼくらのひよこプロジェクト・絵本

食　いのち　すべてをつつむ愛

～学ぶ機会、教える機会、会社全体を「学校」にしたい～

■自身が実習生だった思いを共有

1940年代に考案した育雛法を全国に普及させ、採卵養鶏家として初めての黄綬褒章を受章した（株）愛鶏園の後継者として、齋藤社長ご自身も、実習生として単身アメリカで2年間養鶏を学んだご経験を持つ。当協会とのご縁がきっかけでインドネシア人実習生と接するようになった齋藤社長は、配属された実習生と対面したときは必ず「よく学び、よく遊べ」と教えるそう。よく遊べ、つまり良い仲間を作る、実習で得た仲間は時を経ても続く一生の宝とのご自身の実感だ。学びについては技能はもとより、最近は特に日本語を重視しているとのこと。これは当協会送り出し機関PT. JIAECデポック研修センターを視察された際、齋藤社長を慕って集まった元同社実習生と話していて、日本語能力試験上位級の価値を認識したこともある。同社実習生にはN2級はもとよりN1級合格者もおり、帰国後のキャリアにも大きく差が出てくることを、在籍している実習生たちにもっと知らしめて、向上心を引き出す。同社実習生の多くが3号移行を希望している中、N2級を要件にするのもひとつのモチベーションアップにつながるかもしれない。そのためのサポートに知恵を絞っていると齋藤社長は笑顔で語られた。

管理部　茨城業務管理
大城由美子様

■N2、N1級取得を奨励

茨城生産部の澤口淳一部長は、第1期生の受け入れとほぼ同時期に入社、苦心を重ね実習生と共に現在を築いてこられた。はじめは各事業所にひとりずつだった1期生が、努力家で確実に能力を伸ばす様には心打たれたそう。先輩たちの良き行いが実を結んでの実習生40人体制ではあるが、多人数ならでは工夫を必要とする面も出てきた。澤口部長は3号実習生のリーダーシップを引き出す指導に取り組まれている。生活指導を担当されている管理部の大城由美子様は、実習生たちがのびのびと暮らしつつも、「自分たちは日本のルールを守ってきちんとやっています」と胸を張って言えるように、と心のあり方を導いて下さっている。

日本の規律正しさ、整理整頓や衛生管理を学んで帰れば祖国に多大な貢献ができるはず、と澤口部長。

1、2号実習生として3年間の教養課程を終えて祖国で実業に従事したのち、新たな課題を持った3号生として2年間の専門課程に取り組む。帰国実習生の実際や3号実習生の成長を通して、齋藤社長は技能実習生制度が次の段階に進んでいるという確かな実感を得ている。インドネシアの鶏卵消費量は伸び代があり、養鶏業の可能性は大きい。（株）愛鶏園でさらなる学びを得た卒業生が祖国で養鶏場を経営し、安全なたまごを皆の手に届ける日が来ることを齋藤社長は期待している。

生産本部　茨城生産部
澤口淳一部長

ボーリングやフットサル大会、バーベキュー、望年会など、多彩な交流は常に全力

実習風景紹介